

# 近代初期における学術雑誌の写真利用 - 『考古学雑誌』を事例として -

平澤 加奈子(國學院大學大学院博士課程後期)

## 1. はじめに

今回報告題名に挙げております「近代初期における学術雑誌の写真利用」、特に今回は『考古学雑誌』を中心としてですけれども、実際は國學院大學学術フロンティア事業のプロジェクト「歴史系学術雑誌に掲載された写真について」における成果の一部であります。このプロジェクトの内容は、日本における近代印刷技術を用いた画像資料の導入期である明治から大正期を対象としまして、歴史学系の雑誌に於ける画像資料の使用時期とその展開、またその中で用いられた印刷技術についてのデータ収集を行いつつ主にやっております。その目的を述べますと、

当時の日本の画像資料における近代写真・印刷技術の変遷との対比

技術者(写真師など)から研究者、一般へとつながる写真技術の拡がり

当時の歴史学界における画像資料導入への取り組み

文化財保護制度や大学など研究機関の動向との関係を明らかにする

という、4つに基づいてこの作業を進めております。

そこで本報告では『考古学雑誌』を素材にいたしまして、近代初期の歴史学系雑誌における画像資料のあり方を分析するという事で、報告させていただきたいと思っております。

## 2. データの提示・グラフ(出版社・図版の変化)

まず基礎データを述べたいと思っております。今回対象としました期間は、『考古学雑誌』の前身雑誌である『考古学会雑誌』1編1号(1897(明治30)年12月)から『考古学雑誌』6巻12号(1916(大正6)年8月)までの約20年間です。雑誌の変遷につきましては、『考古学会雑誌』『考古』『考古界』という前身雑誌を経まして1911(大正元)年9月から『考古学雑誌』として発刊され、今に至っているということです。

画像資料と雑誌との関係ですぐに思い付くものとしては、印刷所の変遷が挙げられると思っております。ただ、この印刷所自体が元来どのようなものを印刷していたのかはなかなか突き止めるのが難しいもので、わからない部分もありますので、教えて頂ければと思っております。建昇堂や弘文堂など数社ありますが、『考古学雑誌』になりましてからは26巻6号まで聚精堂印刷所によって印刷が行われています。

実際データ項目についてですが、雑誌名、巻号数、発行所、印刷所、発売所、page1(総合)、page2(単独)、タイトル、撮影・印刷者、印刷技術、関連論文、その他、出版年月日、備考という14項目を設定し、それに従って入力作業を進めている状況で、現在総データ数は1736です。

## 3. 考察

次に、考察に移らせていただきます。

### a. 『考古学会雑誌』にみる印刷技術(グラフ1参照)

グラフ1を御覧下さい。これを見て頂きますと分かるように、『考古学会雑誌』の特に1編1号~2編9号まではほぼ図版が口絵・論文内を問わず、木版となっております。なかには石版・榻写版と思われるものが各1点含まれておりますが、大部分は木版です。

ちなみに、『東京人類学会報告』-これはのちの『人類学雑誌』なんですが-、これは『考古学会雑誌』

誌』が発刊されるより前からある雑誌ですが、この中では1巻1号(1886(明治19)年2月)から石版が巻末図版として用いられておりまして、なぜ『考古学会雑誌』では木版しか使われていないのかという点につきましては、現段階では不明であります。

またグラフ1の中で注目していただきたいのは2編10号(1899(明治32)年6月)のところですが、ここでは口絵図版に「扇面写経地紙畫」がコロタイプを使って印刷されているのですが、その後コロタイプ印刷は『考古界』 - 『考古学会雑誌』の2つ後の雑誌ですが - の5篇1号(1905(明治38)年9月)まで一度も使用されていない状況が見られます。

#### b. 『考古』にみる印刷技術(グラフ2参照)

次に『考古』にみる印刷技術についてですが、まず印刷技術上で特筆すべき点はグラフ2をご覧頂いて分かるように、網版が導入されるということです。特に口絵図版についてはほぼ網版に統一されます。

また口絵図版には、「原田印刷所」・「製版：田中猪太郎」(写真1)といった、印刷所や製版者などの記載がなされるようになってきています。さらに、若林勝邦という当時の考古学界において主導的な立場にあった考古学者が、写真師を連れて撮影していたと記されているものもありまして、当時実際に写真をとる場合に写真師を連れて撮影していたということもわかります。これは文化財の中で画像資料が使われていく変遷と一致するところで、当時の考古学界における写真技術の浸透過程を反映していると考えられるでしょう。

#### c. 『考古界』にみる印刷技術(グラフ3参照)

次に『考古界』の方にいきたいと思いますが、実際の画像資料について撮影者の名前が出てくるといった点が注目されます。例を挙げますと蒔田鎗次郎・摘精三(臨時部員)・関野貞・中島幹・小川一真・鳥居龍蔵などですが、ここでは写真師のみが撮影するに限らず、研究者自身もカメラを入手し写真を撮影するようになったことがわかります。つまり、この時期には研究者が撮影するといったスタイルへ転換する過渡期と位置付けることができるかもしれません。

グラフ3をご覧下さい。木版は未だ多いのですが、今度は口絵図版に写真銅版という技術が使われ始めております。口絵図版は1篇4号(1901(明治34)年9月)以降、網版から写真銅版へと移っていきます。先に述べた『考古』では主に網版が使われていたのですが、『考古界』になりますと1篇4号から写真銅版となり、その後5篇1号からはコロタイプが使われ、6篇11号(1908(明治41)年2月)からはほぼコロタイプに統一されていくといった過程を辿ることが確認できます。

また、4篇以降に見られる事象として、論文中の図版 - 木版が殆どなのですが - の端の部分に図の作者が自分の名前をサインのような形で記すようになります(写真2)。例として本澤清三郎・和田千吉・高橋健自・古谷清が挙げられます。これは他の雑誌との相対化がまだ図られていないことですので、これから検討すべき課題になるうかと思いますが、作成図版に対していわゆる「著作権」が発生するような状況があったのではないかと考えております。

#### d. 『考古学雑誌』にみる印刷技術(グラフ4参照)

『考古学雑誌』に入りますと、コロタイプ印刷が巻末の折込広告にも使われるようになります。それまではほぼ口絵にしか使われなかったものが、広告などの簡易なものにも使われてくるというように、写真技術の進歩が印刷業界や考古学界へと浸透していき、それを利用するようになる碑が分かるのではないかと思います。また写真技術の中ではズンク版を使用した図版もいくつか見られます。

もう一つ特筆すべきは、本文内に使用される図版です。『考古学雑誌』以前はほぼ全てが木版だったのですが、特に写真の図版の場合は網版を使うようになります。しかし、実測図などには木版を変わ

らず使うという様に、用途による使い分けが為されているといえます。

その他当時の感覚を示すものとして少し述べますと、『考古学雑誌』3巻8号(1913(大正2)年4月)に引かれている『肖像』第1輯の記事には、以下の様な記載があります。

「由来肖像画は原本に比して面貌等毫末の差異なきを貴とするものなれば、写真によること最適當なれども、帝国大学史料編纂掛発行の絵葉書に於いても世間はコロタイプよりも木版彩色刷を歓迎する如く、多少の遺憾はありとも此の如く色彩の現れたる方一般の希望に添うものなるべし」

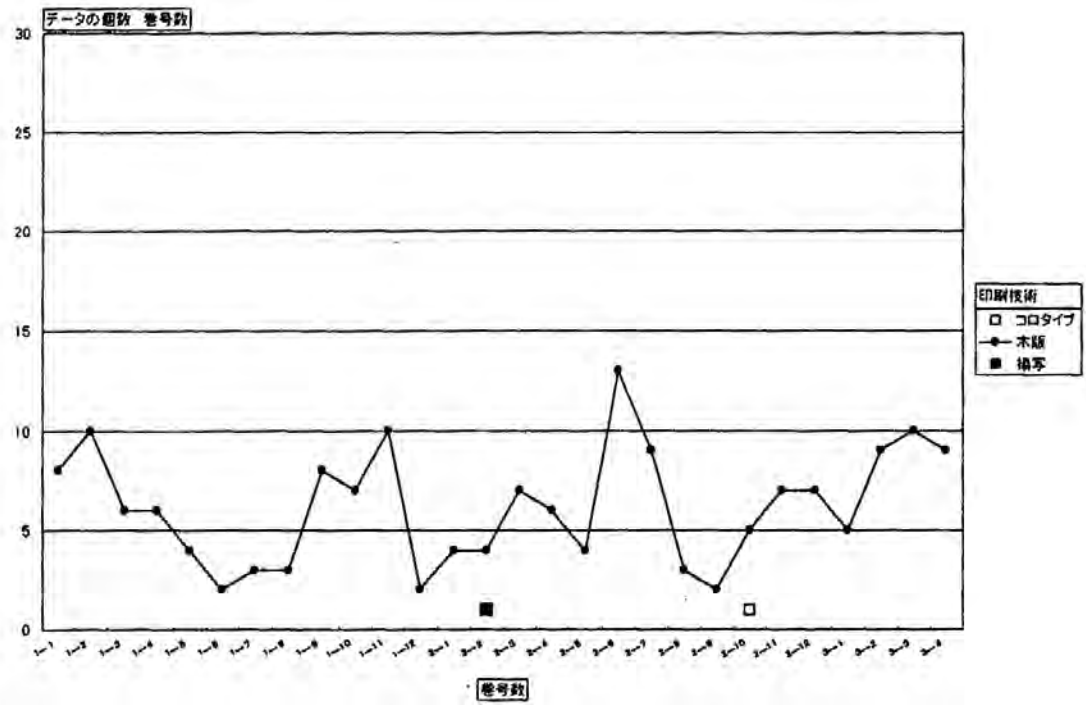
これを見ますと、実際に写真というものが使われてはいるのですが、当時の一般の人々や研究者で絵葉書を作成する側などからすると、やはり木版彩色刷も好んで行なわれていたということが分かるのではないのでしょうか。

#### 4. おわりに

以上、『考古学雑誌』を例に挙げて近代の歴史学系雑誌における画像資料の導入・展開について簡単に述べました。最後になりましたが、このデータベース作成作業の中で、当時における「考古学」の概念は非常に曖昧なものだったのではないかという印象を受けました。それは、雑誌に収められた論文や図版を見れば明らかなことなのですが、その内容が考古学に限らず、民俗学や、文献史学、人類学など、広く他分野に及んでいます。実際には「考古学」が学問として出発した時期から大正年間にかけて、現在のような概念へと徐々に出来上がってくると考えられます。

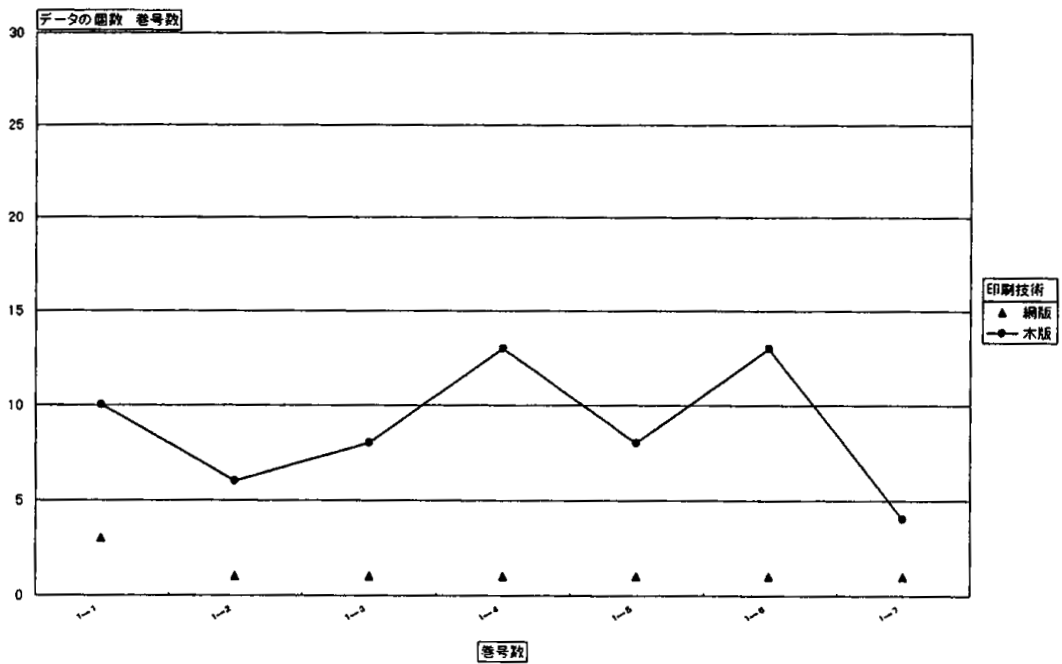
今後、他の雑誌についても同様の検討を行なっていくことで、印刷技術のみならずこの時期の文化財行政や考古学界、研究者の中でどのように画像資料が扱われていくのかといった点などについて考察し、また今回報告のありました大場磐雄氏や柴田常恵氏の研究などともリンクできるようにしていきたいと思っております。以上で報告を終わります。

雑誌名 『考古学会雑誌』



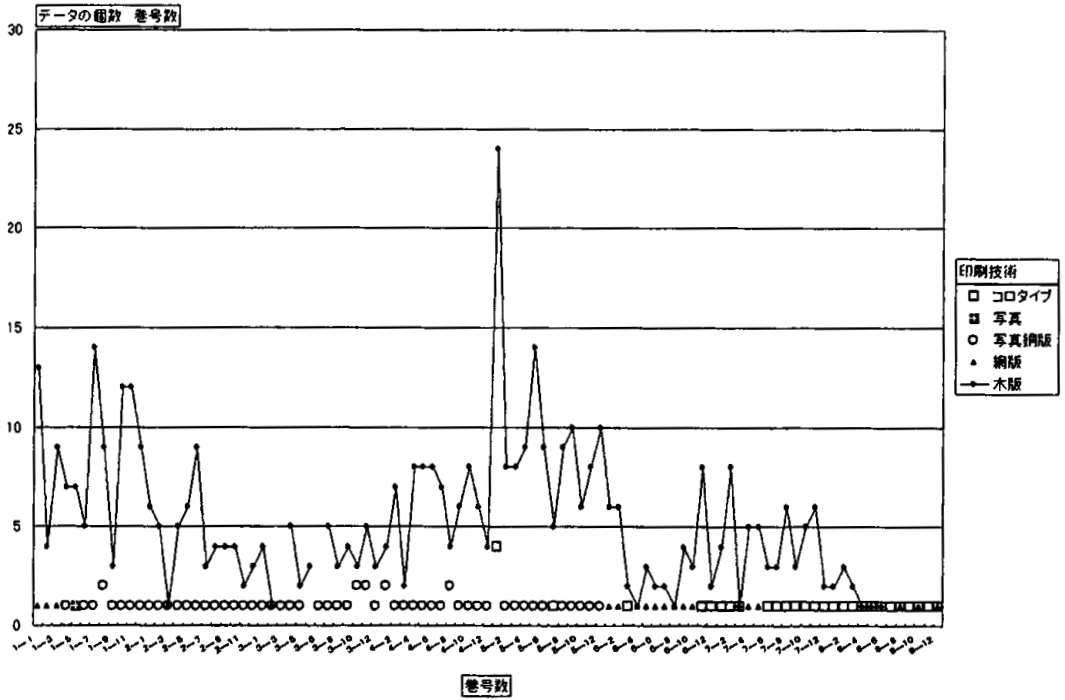
グラフ1 『考古学会雑誌』にみる印刷技術

雑誌名 『考古』



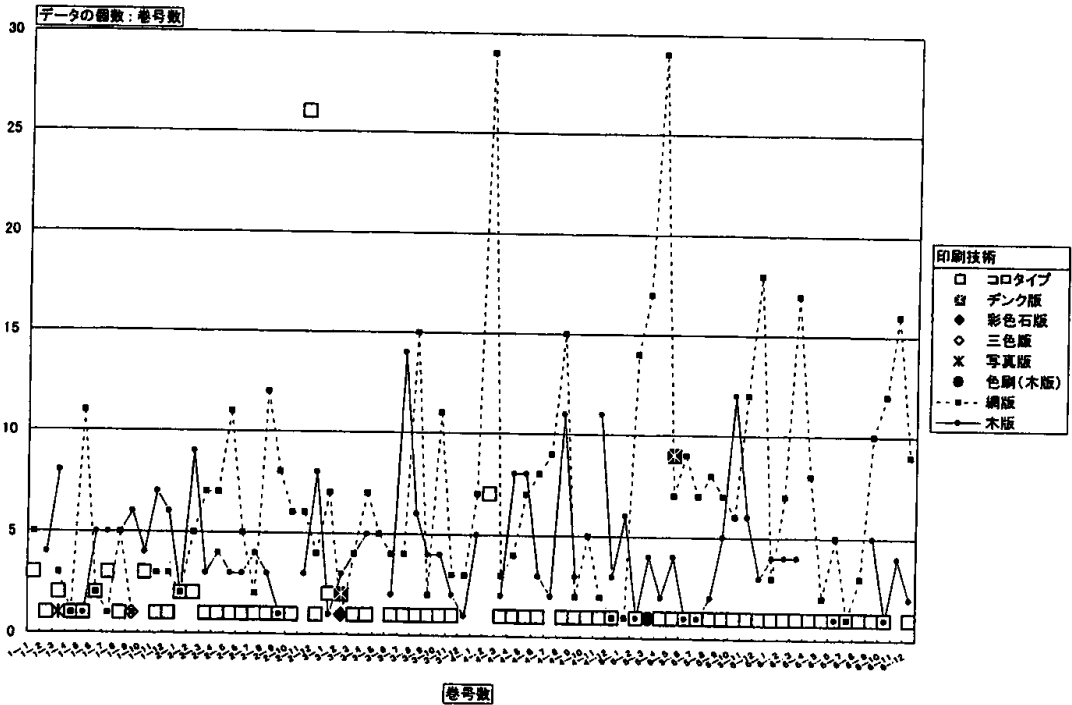
グラフ2 『考古』にみる印刷技術

雑誌名 考古界



グラフ3 『考古界』にみる印刷技術

雑誌名 考古学雑誌



グラフ4 『考古学雑誌』にみる印刷技術

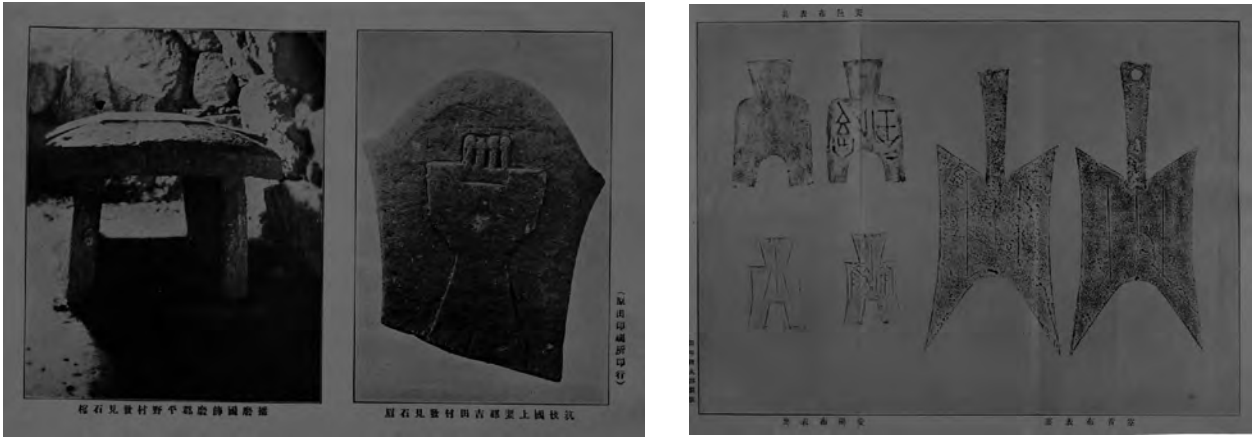
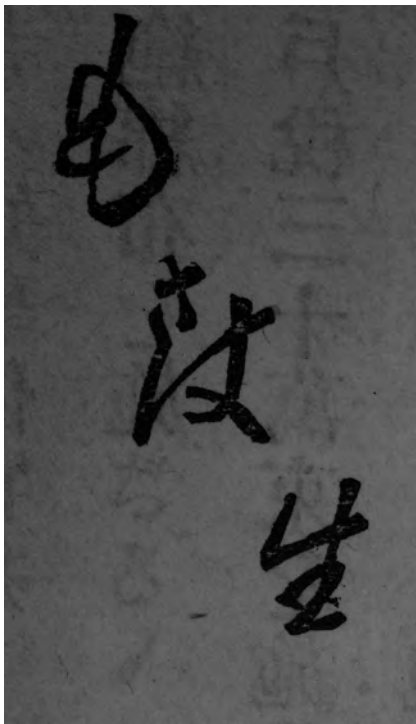


写真1 印刷所・製版者の例（左：原田印刷所 右：田中猪太郎製版）



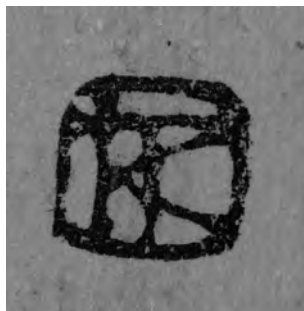
1 本澤清三郎



2 和田千吉



3 和田千吉



4 高橋健自



5 山中笑

写真2 サインの例